2017 年度　事業報告書

特定非営利活動法人
茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会

指定管理第3期2年目。本年度も「自然環境を地域の財産としてより豊かに、未来へ引き継いでいく」「地域の方々に自然の恵みと魅力を感じていただけるように管理を行う」ことを基本方針として活動を行いました。

天候による変更を除いて概ね、事業計画通り無事に終了しました。本報告では、課題や今後に向けた展望を中心に報告いたします。

【施設管理事業】

これまでと同様の作業を行いました。施設点検のほかに、自然体験施設特有の作業として草刈り、ササ刈り、低木刈り、高木伐採、竹間伐などを行いました。刈ったササや伐採した木などはそのまま長く放置せずに、薪・ほだぎ・土留め・丸太椅子・杭にするなど活用し、チッパーにかけ、チップは園路敷材、堆肥等に使いました。

焼き板の看板

園内の案内看板が古く腐食してきたため、焼き板を製作、リニューアルし見栄えよい看板ができました。

植生豊かな公園づくり　植生調査や生物観察をふまえ、草刈りや枝落とし作業を行いました。来園者が各所で季節の花や実などを見ることができるよう、里山風景を楽しめるように心がけました。

安全第一　作業において、特にスタッフは「安全第一」を合言葉としました。定例作業には子どもも参加しています。皆が怪我や事故なく、楽しく作業できるようにお互いに声をかけあいました。また、作業者の緊急連絡簿の整備をすすめ、作業場では道具や装備の用意と片付け、作業時間と休憩のバランス、チェンソー使用のルール順守など、基本を守り行いました。

害虫被害予防　スズメバチ被害をなくすために、生息数を減らすことが重要です。女王バチ駆除のため、冬季の越冬個体さがしと、春季のトラップ設置を行いました。夏から秋には、特に園路周辺に巣が作られていないか巡視し、作業や催し前の確認を念入りに行いました。

この数年、イラガ＊が増えています。来園者に被害は起きていませんが、初夏、園路そばの同じ個所で発生しています。初期段階で処置したいところですが、毎年、多数の幼虫があちこちに散らばってからの発見と処置を繰り返しており、悩ましいところです。　＊ヒメクロイラガ

園内は夏になると蚊が多く発生し、とても煩わされます。発生抑制のため、竹の切り株に雨水が溜まらないように切れ込みを入れるなど対策をとりますが、梨のつぶてです。蚊取り線香頼みの夏は、一般の方が気楽に山に入れない状況となっています。

枯木枯枝除去　春と秋に、枯枝落下等による事故防止のため、園路周辺の目視調査を行いました。ほか、作業や巡回時に注意を払い、必要に応じて伐採など行いました。

大径木　日照改善のため、東山の西斜面周辺のコナラ等 9 本を横浜市に依頼し伐採しました。同じ造園業者に依頼し、3本を追加伐採しました。

搬出できなかった丸太

生態園の樹木はほとんどが斜面に生え、混みあって分布しているため、伐採も丸太搬出も人力で行わざるを得ません。さらに木々は高く太くなっており、今回は事故を避けるため、重すぎる丸太の搬出を断念しました。造園業者にとっても危険を伴うほど、管理が困難な状況になっています。搬出できなかった丸太は乾燥し少し軽くなった後に、自分たちで搬出したり、近場で丸太椅

子にするなど工夫しますが、多数の処理は困難です。今後、木々の成長に伴い、困難な状況は恒常化すると予想されます。横浜市とさらに相談を重ねて対処を考えていかなければなりません。

課題　樹木伐採とその処理

【自然再生事業】

〈植物管理〉

特に大きな問題は生じていませんが、高木の成長による林床の日照不足が気になる場所が多くあります。東山では、昨年度に続いての伐採である程度日照は改善されました。しかし、全般的に樹冠の広がりが目立ち、また、生態園外部（西側）の高木類（シラカシなど）の成長による園路周辺の暗さも気になります。

低木、小高木については、昨年度に続いて東山ほぼ全域にわたって手をつけました。しかし、明るくなった半面、実生株など生育は早く、好ましい状態を維持するには人手不足は否めず、苦しいところです。

田んぼ畔の改善工事にともないアリアケスミレ、ゲンノショウコ、コケオトギリなどの保護が必要でしたが、アリアケスミレ、ゲンノショウコについては一先ず維持することができ、懸念されたコケオトギリも少数ながら種子からの発生が確認されました。しかし、アリアケスミレの株数は少なく、今後とも観察と丁寧な保護が必要な状況にあります。

シロバナサクラタデ

課題はあるものの、全体的には植生環境は改善されてきていると考えられ、各所でのオオカモメヅル、ハナイカダ、ガマズミなどの増殖、トンボ池付近でのシロバナサクラタデ、キチジョウソウの増殖、外山でのオカトラノオ、コウヤボウキの増殖とササバギンランの新規発生、田んぼ付近でのシロバナノダケの新規発生、御手洗池付近でのホオノキの初開花など、好ましい状態も得られています。しかし、イチヤクソウ、オトギリソウ、オオバノトンボソウ、オケラ、オニノヤガラなどの生育状況は依然として思わしくなく、心配な状態が続いています。

帰化種の侵入にも注意していなければなりませんが、ハルジオン、ヒメジョオン、オオイヌノフグリなどは別として、フラサバソウ、アレチギシギシ、オオアマナなどの侵入がありますが、大きな問題とはなっておらず、在来種による植生環境は安定して来ていると考えられます。

なお、管理とは別の問題ですが、野草や低木類の開花時期の乱れや開花期間の短縮傾向が続いており、いずれ、植生管理のやり方にも影響が出て来るのかも知れません。（この傾向は 2018 年春にはさらに顕著になっています）。

〈水辺管理〉

生物調査、外来種駆除、アシ刈り、泥浚渫などを引き続き行いました。

また、11 月に近隣のせせらぎ公園池で行われたかいぼりに協力、生物採取、観察など行いました。せせらぎ公園池の生物種数はとても少なく、ブルーギル等外来種が原因と考えられます。このことから、アメリカザリガニを除く外来種を駆除することのできた御手洗池において、生物環境の安定維持をめざして活動に取り組む意義が、改めて認識しました。

アメリカザリガニ

外来種駆除　在来生物への捕食圧と、水環境悪化を軽減するために、アメリカザリガニの駆除を中心に行いました。生態園全体の水辺で 2004 匹捕獲しました。（前年 1644）　まだ先は見えません。ザリガニと同様の理由から、4 匹いるとみられるコイについても捕獲を試みましたが、失敗に終わっています。

水生生物保護　例年通り、御手洗池の生物モニタリング（月1）と生物調査（年4）を行いました。希少種を含めて在来生物の生息と再生産を確認していますが、池の生物割合、希少種の繁殖期等に変化が見られました。これまでのデータをまとめて年変化を把握し、注視していかなければなりません。（資料p6，7）

ニホンアカガエル保護に関しては繁殖期に 17 卵塊を確認しました。順調にふ化したものの、幼生は次第に減少しました。観察から、カルガモ等捕食者が原因と推察されました。対策が急がれます。

池の泥　本年度もかいぼりを実施しましたが、泥を浚渫できるのは沿岸部のみです。池の中央部には泥が1m以上堆積し、進行していると考えられます。そのことが生物環境として問題であるかどうか判断はまだできませんが、課題を明確にするために調査観察する必要があります。

水生生物看板　保留となっている看板(希少魚も含めたもの)の設置について、特に進展ありませんでした。地域の方々に、横浜在来の水生生物に親しんでいただき、水辺の保全について理解と協力をいただくための良い機会になると考えられます。横浜市と相談を引き続き進めていきます。

<昆虫の観察>

観察は 8 年続いています。地域の昆虫類とその変化を知る貴重な基礎データです。（資料 p8）

課題　・水生生物年変化、池環境の把握

【田んぼづくり事業】

生きものと里山景観の保全　草花やドジョウ、トンボ、オケラなどを楽しんだり、その生息環境に配慮しながら米作りを行いました。人と自然がつくる四季折々の田んぼ風景は、散策に訪れる方々の気持ちをほっと和ませ、故郷を懐かしく思い起こす風景となったようです。

楽しく元気に　米作り体験は相変わらずの人気で、2～3 倍の応募がありました。リピーターさんたちは「子どもがどうしてもやりたいと言う」「おもちの美味しさが忘れられない」などと米作りを続ける理由を言われます。子どもたちはアメリカザリガニなど生きもの採集にも夢中になり、また、おとなも子どもも毎回、泥や埃にまみれながら、皆で力を合わせるお米づくり作業を楽しんでいます。（資料 p12-14）

かけっこ（しろかき）

下の田では今年も茅ケ崎小学校と茅ケ崎東小学校 5 年生が米作りを行いました。3 月には教育委員会北部学校教育事務所より、米作りはじめとした協力に対して感謝状をいただきました。

生態園に適した土づくり　小学校では稲わらで正月飾りを作りますが、その際に綯うことが出来ないほど生態園産稲わらの脆いことが悩みとなっています。現在、田んぼ肥料として、堆肥と池泥、ザリガニ粉を投入していますが、これだけでは不十分と考えられます。そのため次年度から、田に御手洗池の水をポンプアップして入れる試みもする予定です。化学肥料を入れない米作りで、園内の自然由来のものでどこまで改善できるのか、試行錯誤が続きます。

ほか　米の収穫量は多かったものの、秋の長雨も手伝い、もみ米の乾きが悪く、米自体は不出来となってしまいました。一方、下の田で小学校が作った稲は、学校フェンスに干しますが、よく乾いていることから、湿田に「はさ」を立てて干すことに疑問が生じました。次年度は干し場を移動する予定です。

はさかけと案山子

また、子どもたちも大好きなおもちですが、これまで行ってきた「もちつき」の催し内容は盛りだくさんで、スタッフの負担が大きいため、内容のスリム化を検討中です。

課題　土づくり

【自然環境教育事業】

ブルーギル釣り体験

生態園らしい催し　計画に沿って実施しました（資料p1-4）。講師の皆さんは長く続けてくださっている方々で、それぞれに参加者が楽しく満足できるようにご尽力くださいました。また、初めての企画として、水辺スタッフの大学生が外来種問題をテーマにブルーギル釣り体験を開催、水辺保全の重要な主題に取り組むことができました。その際にはせせらぎ公園の公園池を使わせていただきました。

「めざせ！ザリガニマスター」　特に春から初夏、ザリガニの入ったバケツを下げて列をなす大勢の親子に、スタッフがてんてこ舞いしてしまうこともあります。本年度は計 9686 匹のザリガニを引き取り、動物園への提供と肥料化で有効活用しました。要注意外来生物のアメリカザリガニには、全国の水辺で活動する人たちも苦慮しています。この催しを一般の方々に外来生物について考えるきっかけとして、他団体にも広げようと試みましたが、十分な機会を作ることはできませんでした。今後も働きかけていきます。

「茅ケ崎の昔を聞く」 3年目となりました。春に2回実施しました。地域の方々の歩みや記憶、思いをわずかでもお伺いし、施設の維持管理をする上での参考とするために貴重な記録となります。継続していきたい事業の一つです。

茅ケ崎の昔を聞く

教育機関の自然体験活動支援　米作りはじめ小学校のクラブ活動等、要請に応じて協力させていただきました。また、東京都市大学の研究室は 2 年間、生態園のニホンアカガエル調査を行い、その成果が卒業論文にまとめられました。水辺生物保護における課題をとりあげ、提言を示してくださいました。今後も協力と連携の続くことが望まれます。

【自然の普及啓発事業】

広報　生物展示、写真掲示、来園者への案内などを行いました。古いパネルの刷新はできませんでしたが、会員の写真提供により「今見られる自然」と題し、新たなパネルを不定期で掲示しました。

三版目となる三つ折りパンフレットは、写真とスタッフによるイラストを多用して、まもなく完成する予定です。

地域紙 「タウンニュース」への生物記事掲載を続けています。記事を切り抜いて生態園を訪れる方も見受けられ、施設を知っていただく良い機会になっています。（資料p33-35）

区民活動センターの発行する冊子に、生態園の活動情報などを掲載していただきました。写真は会員の方々撮影によるものを使わせていただいています。

植物ガイドブック　植物グループの手がける「ようこそ生態園へ」3冊目を夏に発行しました。心待ちに予約されていた外部の方もあり、「わかりやすい」「とてもよい出来」と好評をいただきました。

【運営ほか】

消費税　2016 年度に課税売上高が 1000 万を超え、2018 年度より課税事業者となりました。吉岡会計事務所の協力をいただき、3月に消費税課税事業者届出書提出を完了しています。課税負担が生じることを受け、事業の運営面について見直しや工夫を図るために検討を続けています。

認定 NPO 法人　取得をめざし、神奈川県と横浜市の窓口にて相談し、検討しました。まず指定 NPO 法人を取得することがよいと確認しました。事務作業全体の質量を見渡し、2019 年度に取りかかる予定です。

来園者アンケート　126 通の回答をいただきました。 感想では「管理者の愛情が感じられる。雰囲気が

最明寺に似ている」「このような場所があって贅沢」「静かで、色々名札があり、わかりやすい」など、管理の成果を感じられる声が多く聞かれました。一方、要望では「水をきれいにしてほしい」「外来種を絶滅させたビオトープはない。在来種との共存方向へ見直すべき」など課題に迫る意見もいただきました。（資料p9-11）

開園日のアンケート台

他団体との連携　舞岡公園（戸塚区）やこども自然公園（旭区）の指定管理者と不定期に情報交換会を行いました。また、せせらぎ公園古民家（都筑区）には池の使用や物品提供などご協力いただきました。中央公園（同区）と情報交換会を行い、ザリガニ駆除についてご協力いただいています。ほかにも TR ネット、ノーバスネット、三ツ池公園水辺愛護会などには情報やご助言を多々いただきました。今後、当団体からの経験に基づいた情報をより多く提供していけるように、充実した活動を継続することが望ましいと思われます。

活動の後継　事務局スタッフの交代、水辺スタッフの卒業と新入がありました。事務局ではさらなる交代に向けて準備を進めています。生態園を担う次の世代がいることは、とても恵まれた状況だと言えます。

しかし、活動全体において後継者が十分なほどには人の層は厚くありません。これからもより多くの人が生態園の活動に関心をもったり、気軽に参加したりできる機会を設けていく必要があります。自然の恵みを生かした魅力的な公園づくりと、催しの開催を継続していくことが重要です。

草だんごづくり

課題　運営見直しと工夫　活動の継続